



公益社団法人  
北海道国際交流・協力総合センター  
HIECC/ハイエック

Hokkaido International Exchange and Cooperation Center

# であい

## 2019年度 「高校生・アジアの架け橋養成事業」 高校生がみたカンボジア

北海道国際交流・協力総合センター（HIECC）では、開発教育分野の専門家と実践者である2名の指導者のもと、道内の高校生を対象に開発途上国へのスタディツアーを含む人材育成事業を平成22年度より実施。今年度は札幌、ニセコ、登別、帯広、釧路などの地域から選抜された10名の高校生が参加。2回の事前研修を経て7月28日から1週間カンボジアを訪問し、現地では不発弾処理をするNGO、JICA事務所、障がい者支援団体や養護施設を訪問。さらに、カンボジアの歴史を学べる施設なども視察した。帰国後は2回の事後研修を経て、2グループに分かれ所属する高校で報告会を行った。

### 【自分の目で「本物」を見て感じる】

カンボジアの首都・プノンペン年間平均気温は25度以上。北海道とは明らかに違う暑さや湿気を感じながら、これから過ごすカンボジアでの7日間に期待と不安を抱きながらスタディツアーがスタート。

出発前に札幌のNPO団体の活動の一部をお手伝いし、自らの手で整備しカンボジアまで運んだ車いす2台を携え障がい者支援団体へ。手足に不自由を抱えながらも、黙々と手工芸品制作に励む女性たちに出会った。札幌から運んできた2台の車いすをお渡しすると、少し緊張していた女性たちの表情に笑みがこぼれ、高校生は「自分たちの手で渡せて本当に良かった」と嬉しそうに話していた。



自らの手で整備しカンボジアまで運んだ2台の車いすを贈呈

滞在中は2つの養護施設も訪れた。事前研修で「カンボジアの子どもたちに楽しんでもらいたい」と、10人で話し合い準備したゲームやアクティビティを紹介。すると、子どもたちから期待していた以上の反応が。ダンスやゲームをしているうちに、いつの間にか手を繋ぎ一緒にしゃがみまわっていた。つい数時間前に会った子どもたちの

笑顔と優しさに触れ、お別れをする頃には大粒の涙が高校生の頬を伝っていた。しかし、訪れた施設の子どもたちは、路上で生活をしているところを拾われたり、育児放棄をされたりと、家族と一緒に住めない背景を持つ。毎晩のホテルのロビーで行われたミーティングでは、交流中に見せてくれた屈託のない笑顔とその背景にある事実葛藤し、仲間同士で疑問や意見をぶつけ合った。



子どもにアドバイスをうけ慣れない手つきで鍬をふるう高校生

### 【感謝を言葉で伝えられる人に】

「カンボジアに行き、家族や自分の周囲の人に感謝しなければいけないと気づいた」と一人の高校生は報告会で語った。以前は家族に反抗し喧嘩することもあったそうで、担任の先生からも、「カンボジアから帰ってきて明らかに変化した」とわざわざ報告の電話があるほどだった。

カンボジアで過ごした7日間で、高校生10名はそれぞれ違う場面で自分を見守り支えてきてくれた人を心に思い浮かべたのかもしれない。自分自身の変化や思いを原稿に認め、報告会では同じ年代の相手に緊張しながらも一生懸命伝えた。同世代の目線で経験を語る10人の言葉から共感の輪は広がり、高校生たちは自らの言葉の力で「アジアの架け橋」を築いていた。



カンボジアで学び考えたことを発表する高校生

## 令和元年度北海道外国訪問団 アルゼンチン青年交流団受入事業 (1月29日～2月5日 受入)

「北海道外国訪問団受入事業」は、本道からの南米への移住者子弟を北海道に迎え、「父祖の地・北海道」について認識を深めるとともに、道内の関係者との交流を通じて相互理解を促進し、北海道と移住国との親善交流に寄与することを目的に実施。令和元年度で24回目の開催となり、この度3年ぶりにアルゼンチン共和国からの青年を受入れた。

2017年に北海道民アルゼンチン移住100周年を迎え、今回はその大きな節目を終え、新たな北海道とアルゼンチンの交流の歴史をつくる訪問団6名(久木マルガリータ団長、ほか5名)が来道。今年の北海道は例年より降雪は少なかったが、それでも現地とおよそ30度近くの気温差があり、滞在中は北海道の真冬の寒さと厳しさを存分に満喫した。

訪問団のプログラムには北海道の産業や歴史、自然や文化などを体験できる内容が盛り込まれ、久木団長が適宜わかりやすくスペイン語に通訳してくれたおかげで、団員は常に関心を抱いて各活動に参加していた。札幌市郊外で、冬ならではの犬ぞり体験

や雪山チューブ滑りをしたときは、完全に寒さを忘れた様子で、全員が童心に帰って雪遊びを楽しんでいた。

滞在4日目と5日目には、親戚や知人宅で2泊3日のホームステイを体験。受入れ側の日本人家族には、団員と円滑に会話ができるようにと通訳機器を準備するなど、真心からの歓迎をする様子が見られた。最初は言葉の壁もあったようだが、互いが持つ道産子の温かさや優しさによってすぐに垣根を超えられ、団員にとっては自身のルーツに触れられるかけがえのない時間となっていた。今回の訪問団6名がアルゼンチンと北海道の友好と絆をさらに深めた意味は大きく、この交流が両国の関係をさらに発展させていくのだろう。



北海道神宮本殿前での記念の一枚をパチリ

## 令和元年度 北海道総合防災訓練(厳冬期) ～まさかは必ずやってくる!～

(1月25日(土)～26日(日) 北見市)

「もしも真冬に…大災害が起きたら…」。2018年9月6日に北海道を襲った北海道胆振東部地震を経験した際、多くの道民の脳裏をよぎった言葉かもしれない。

1月と2月の最低気温の平均がマイナス10度を下回る北見市にて、厳冬期における自然災害による大規模停電の発生を想定し、発生直後の避難所における寒さ対策に主眼を置いた訓練が行われ、防災を担当する市町村職員など188名が参加した(主催:北海道、北海道防災会議)。

1日目の最初の訓練は北海道看護大学敷地内の体育館にて実施。体育館には当然暖房は入っておらず、ほとんど外気と変わらないような気温に設定され、参加者は冷え切った床の上で就寝する体験をした。持参した寝袋や支給された避難時用の毛布1枚を下に敷いたり体に巻き付けたりしても、まったく暖をとれず、ほんの短い間でも、真冬に避難する厳しさを思い知った。夕刻には北見工業大学の体育館へ移動したが、こちらも暖房を稼働させておらず、広い体育館内に簡易的な暖房設備が少数あるのみ。しかも照明もなく薄暗いと、ますます肌寒く感じた。底冷えする床に腰を落としての夕食体験では、自衛隊による炊き出しで温かいご飯とお味噌汁とおかずが提供された。寒さの中で食べる温かい食事のありがたみを感じながらも、数分もしないうちにすぐに料理が全て冷めてしまい、



冷え切った体育館の床での過酷な就寝体験

厳冬期の訓練がいかに大変なのか改めて知った。その後、ほとんどの参加者は段ボールベッドなどで寒さ対策を施し就寝体験も行った。

今回の訓練では、防災を担当する自治体職員が主な参加者であり、訓練中に発信される情報は全て日本語で行われていた。しかし、厳冬期の避難所に日本語を理解できない避難者がいれば、今回の参加者が感じた以上の寒さや不安を感じるの間違いはない。防災・防寒グッズなどのハード面だけでなく、高齢者や日本語を理解しない外国人などを含む要支援者に対するソフト面の備えが急務であることが、今回の訓練を通して痛感させられた。



避難所に設置された段ボールベッド